

贖罪の紅椿

のん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一夏は……一夏は帰ってこなかった――。

目次

第3話	第2話	第1話
29	13	1

第1話

一夏は……一夏は帰って来なかった。

福音の攻撃から私を庇った際のダメージが致命傷となつて……そのまま帰らぬ者となつてしまつたのだ。

鈴は涙を迸らせながら私を責め。

セシリアは魂が抜け落ちてしまつたかのようにその顔から一切の感情が消え失せた。

シャルロットは動かなくなつた一夏の遺体に縋り付きむせび泣き。

ラウラはそんなシャルロットの背中に手をやりながらも頬を伝う涙を堪え切れないでいた。

そんな皆を前にただ立ち尽くすことしかできない私の頭に千冬さんはポン、と手を置いただけだつた。戦場に立つのなら死は避けられないものだ——そう言い残して暴走したままの福音の対策を練るためにその場を後にした。

実の弟を失つたというのに……それなのにも関わらず、千冬さんは尚もこんな私に氣を使つてくれたのだろうか。

新たに得た力に酔つてしまつたばかりに——傲慢になつてしまつたばかりに一夏は

死んだというのに、千冬さんは涙をみせることも——激情して私を罵ってくることもしなかった。

幼い頃からずっと……強い人だと……そしてなにより、優しい人だと思っていた。

ただ今の私にはその優しさが……気遣いが……なによりも……なによりも……辛かった。

誰の目も届かない離れた場所で一人崩れ落ちて「いちかあ……いちかあつ……」と泣かれるくらいなら、殴られたほうが——いや、いつそのことその両の手で絞め殺されたほうがマシだった。

一体私は何度、同じミスを犯せば気が済むのだろうか。

中学生の時の剣道の全国大会の時から……いや、それよりも遥か以前からずっとそうだ。

醜いことであることは理解できているはずなのに……それなのに自分で自分をコントロールすることができない。

自分の中にある《力》に振り回されてしまう。《力》を得るとその《力》を振るわずにはいられなくなる。何の意義も、信念もない力はただの暴力でしかない。

わかつているはずなのに……どうして私は自分を抑えることができないんだ。後から気づいたところで、その時にはもう何もかもが手遅れであるというのに。

そして挙句の果てがコレだ。

もう絶対に取り返しのつかない。

償つても償い切れない罪を、私は犯してしまった。

あまりにも惨めで……滑稽だ。なぜ私が生きている？ 私なんか生き延びて、一体

何の意味があるというのだ？

アイツほど優しくて、強い心を持つ人間は他にいなかったというのに。

どうして、どうして、どうして。

「どうして私なんかではなく……一夏なんだ……」

十十

千冬の嗚咽を背に人知れず旅館を抜け出した箒は、ほとんど無傷であつた紅椿を展開した。

それは暴走したままである福音を自分自身の手で止めるため。

もうすでにまともな思考回路では無くなっているのだろう。

任務失敗の上に同行者を死なせ、さらに独断で再び福音に挑もうなど正気の沙汰とは思えない。

ただ、一言、言えるのは——もう箒に居場所など無かつた。

誰よりも愛おしかつたはずの男をこの手で死なせ、大切な友人たちを傷つけた。この

「……」

ゆつくりと視線を落とすと——箒の腹には巨大な風穴が開いていた。

「……ゴホッ」

口内に鉄の味が広がると同時に視界がグルリと反転する。

不意に落下感が襲ったかと思うと、箒は頭から遙か下方の海に墜落していた。

冷たい、暗闇の底へと引きずり込まれていく。

ああ、死ぬのかと、悟り——ああ、死ぬのかと思ひ直す。

これこそが私に相応しい結末。戦いの果てに惨めに死んでいく。力に溺れた愚か者にはピツタリの終幕だ。フィナーレ

「……」

でも、本当になんで……なんで一夏が死ななければならなかったんだ。

悪いのは全部、私であつたはずなのにどうして……。

(ゴメン……ゴメンナサイ、一夏……)

もし……全てをやり直せるのなら……今度は私がお前を守りたい。かつてお前が私にそうしてくれたように。

振り回されることしかできなかつた自分自身の《力》を、今度こそは使いこなして。

もし……この世界に神様が本当にいるのだとしたら……お願いがある……。いや、神

様じゃなくても仏でも悪魔でも誰でもいい。

愛なんていらぬから。

幸せなんていらぬから。

最後にもう一度だけ、私に贖罪のチャンスをください……。

十十

ゆつくりと目蓋が持ち上げると、妙にぼんやりとした視界が目に入ってきた。

そう、たとえを上げるのなら水中でゴーグル無しに無理やり目をこじ開けたような感覚だ——。

「……!?!」

そこに来て箒はようやく自分が水中に沈んでいることに気が付いた。と同時に鼻孔に容赦なく水が浸入してきて、あまりの苦しみに箒は半ばパニックに陥りながらもバタバタと手を上に伸ばした。

「ブハッ! —— ゲホッ! —— ゲホッ! ——」

手すりらしきものを掴んだ箒は一気に自分の身体を引き上げ、咳き込む。

鼻がツンと痛む。どうやらずいぶんと水を飲みこんでしまったようだ。

「ゲホッ! —— ゲホッ! —— ゲホッ! ——」

しばらくむせていた箒であつたが、やがて呼吸が落ち着いてくると辺りを見回す。

そして視界に飛び込んで来たのは、つい今しがた福音に撃墜された海ではなく。

「なっ……!!」

なんの変哲もない、どこの家庭にもあるようなバスルーム……つまり箒は自分以外誰もいない浴槽で一人溺れていたのだった。

(なんだこれはなんだこれはなんだこれは?)

状況が呑み込めず、箒はぬるくなつた浴槽に身体を浸したまま絶句する。

ついさつきまで自分は確かに福音と戦つて、そして無様に敗れたはずなのだ。腹に風穴を開けられて、死んだはずなのだ。いくらISに優れた生体維持機能が搭載されているにしても、あのような重傷では絶対に助かるはずもないのだ。

それに仮に万が一、生還できたとしてもなぜ自分はこんな浴槽で溺れていたというのか。溺れるなら福音に撃墜されたあの海だろう! ——等と若干見当違いな思考を凝らした箒であつたが、やがてのろろとどうにか身体を動かし浴槽から這い出ることに成功した。

そしてバスルームに備え付けられた鏡に移る自分の姿を見て、再度の絶句。

(これはなんだ!?! いったいどういうことだ?)

鏡に映っていたのは確かに篠ノ之箒自分自身の姿だった。だがそれは正確にいうのであれば、今現在の自分の姿ではなく、過去の自分の姿。

まだ胸の発育も始まっておらず、身体も一回り小さい小学校高学年ほどの自分の姿だったのだ。

「ななななんっ……これは……いいいいいいっ！」

福音に開けられた風穴が影も形もなく修復されている事実気づく余裕もなく、箒は若返ってしまった自分の姿を呆然と見つめ続ける。半ば無意識のうちに鏡の自分に向けて手を伸ばすと、鏡に映る少女も啞然とした表情を見せたままこちらに向けて手を伸ばしてくる。——万が一、この鏡に映っている自分の姿が全くの違う赤の他人であるなどというケースを半ば被害妄想のように想像してしまったわけだが、やはりそのようなことはなかった。

「なんだこれは……これはいったいなんだ!？」

バァン! とバスルームを飛び出した箒は叫びながらもフロアリングの廊下をドタドタと走る。バスタオルで身体を拭かなかったため、びちゃびちゃと廊下が濡れていくが、今の箒にはそのようなことを気にしている余裕はなk——

「ふぎゃ!？」

案の定、ツルンと足を滑らせた箒は奇妙な悲鳴と共にお尻から派手に転んでしまう。ゴツン! と少々洒落にならない音が辺りに響き渡った訳だが、ある意味その痛みのおかげで箒はある程度の冷静さを取り戻した。

そうだ……まずは落ち着け……。

その場で正座して深呼吸。とにかくまずは状況を整理しなくては。フロアリングの廊下にて水の滴る全裸の少女が正座とはなんともシユールな光景ではあるが、当の本人は気にしていない……というよりは気づいていないようであった。

(たしかに私は福音に撃墜された……それは間違いないはずなんだ)

想い人
一夏を自分のせいで死なせ、大切な人たちを傷つけた。

そのあまりの罪の重さに耐えきれず……半ば自暴自棄になりながら箒は福音に捨身の特攻を仕掛け、そしてその胸元に刀を突き立てるその寸前で腹に風穴を開けられ、撃墜したのだ。

そして冷たく、暗い海の底に沈んでいく中、願ったのだ。

どうか、自分に贖罪のチャンスを与えてください……と。

「あ」

時間が、止まったような気がした。

まさか、いや、そんなことが——。信じられない思いで一杯になったが、考えれば考えるほどそれしかないような気がしてきた。

その場から立ち上がった箒は物一つ存在しないリビングルームに出た。部屋の隅には引越しのものと思わしき段ボールがいくつか積み立てられている。

そして壁に掛けられていたカレンダーを見て、箒の予感には確信に変わった。

幼くなった身体。カレンダーに示された年数は、あの時から数年遡った時を示していた。

(間違いない……私は時間を遡っている！)

よくよく見ればこの部屋にも見覚えがある。ISの生みの親であり、箒の実姉である篠ノ之束が姿を眩ませ、その結果箒たち家族は政府の定めた《保護プログラム》によって全国を転々と移動させられていたのだ。《保護プログラム》の目的はIS技術の全てを把握している開発者が行方不明の今、テロ組織などが箒たち家族を人質に取り、自分たちの欲求を達成するための手段として利用されることを防ぐ……というのが表面の目的らしい。あくまで表向きというのは、実際箒は束の妹ということもあり政府の役人から絶え間なく束のことやISのことについて事情聴取をされ、それは半ば尋問といっても差し支えないような代物だったからだ。プライバシーもへつたくれも無かったと言っても過言ではなかったのかもしれない。それほどまでに箒はこの《保護プログラム》に対して良い印象は持っていなかった。

《保護プログラム》は箒がIS学園に入学する(させられる)前——つまり中学三年

生の時まで施行されており、今箒のいるこの家——正確に言うのであればマンシヨンの一室——はその《保護プログラム》が施行された初期の頃に移転した際に政府から用意された箒の寢床兼政府の監視部屋だったのだ。

「あ……ああ……あ……」

ぼたぼたと涙が頬を濡らしていく。

膝がガクガクと震え、思わず崩れ落ちてしまう。

戻ってきた。戻ってきてしまったのだ。

どうして時間を遡れたことなど、そんなことはどうでもいい。

自分は……贖罪のチャンスを与えられたのだ。箒が認識すべき事実はただそれだけ

でいい。

「ありが……と……う……ありがとう……ごいいます……」

その言葉が誰に対して告げたものなのかは箒自身、よく理解できていなかったが……とにかく今、箒は感謝の言葉を述べずにはいられなかった。

——守る……今度は……今度はこそはお前を守って見せる。それが私にできる、たった一つの償贖罪いだ。

今にもはち切れてしまいそうなほどの決意を胸に、篠ノ之箒は立ち上がった。

第2話

部屋にあったパソコンを起動させ、《白騎士事件》とワードを入力するとおよそ一千万件を超える膨大な検索結果が出た。

その検索結果をしばらくジツと眺めていた筈であったが、やがて静かに……けれども重くため息を吐いた。

「はあ……」

十十

あれからひとまずバスタオルで体を拭き、寝間着に着替えた筈は時間の逆行、さらには一度は自分のせいで失った想い人を今度は自分の手で救うことができるかもしれないという思いから来るあまりの興奮からベッドに入ることもできず、早速如何にして一夏を守るか画策を開始していた。

今にして思えば一夏は福音戦の時のみならず、クラス対抗戦時の無人機襲来、さらには学年別トーナメント時のラウラのISに搭載されていたVTシステム暴走など死んでいてもおかしくない場面はたくさんあった。

もし仮に万が一、この時の流れが同じように繰り返されると仮定し、はじめ筈はその

ような状況から如何にして一夏を守るか考えていた訳だが、ちよつと待てよ……? とあることに気付いたのだ。

——そもそも一夏がIS学園に入学しなければ……いや、そもそもISが軍事利用などされていなければ、このような未来は事前に回避できるのではないか?

ISが人を殺めることができる兵器であるからそもそも間違っているのだ。本来、宇宙進出を目的として作られたISが《兵器》として認識されたのは、ISの生みの親である篠ノ之束がISの性能を認められず、その性能を世界に認識させるために引き起こした(これはあくまでも箒の予測の範疇を出ないが)《白騎士事件》がきっかけだった。

十二カ国の軍事コンピュータの同時ハッキングに加え、放たれた各国のミサイル二三四一発を《白騎士》と呼ばれる一機のISを纏った謎の女性がたった一人でその全てを切り落としたという歴史的な大事件——それが世間一般の《白騎士事件》に対する認識である。が、箒は束の身内であるために、その事件の首謀者が束であるという予測を——あくまでも予測の範疇を出ないが——立てていた。

これはあまり自分では言いたくないことなのだが、自分は束に溺愛されているという自覚がある。箒自身は想い人^愛や家族と引き離す要因であるISを生み出した束を正直あまり好きになれなかつたが、自分のためにわざわざ専用機である《紅椿》を用意して

くれたり、出会うや否や過剰なスキンシップを求めてくることから、少なくとも他者よりは東に気に入れられている存在のはずである。

つまり箒はこう考えたのだ。

もしまだ《白騎士事件》が起きていないのなら、自分が東に呼びかけることで《白騎士事件》を未然に防ぐことができるのではないかと。

しかしその箒の計画を実行する条件として《白騎士事件》がまだ起きていないということは大前提である。よって手っ取り早く事件がもう起きているかどうかの有無を確認するために、ネットで調べてみたわけなのだが、ここで冒頭に戻る。

「はあっ……」

検索した結果は見事に一千万件を越すヒットもヒット、大ヒットであった。この結果がどのような結果を示していることはもはや明確であろう。

（白騎士事件は防げなかったか……）

予感はしていた。今もこうして《保護プログラム》の傘下にいるということはずなわち、ISが世界に最強の軍事兵器として認識されたからであり、逆に《白騎士事件》が起こっていないのなら、自分はまだ世間一般と何ら変わらぬ一般人であるのだから、このようなマンションの一室などにいるはずもないからだ。

ただ、万が一ということもあるため念のため確認してみたが……やはりそのようなこ

とはなかった。

「……」

考える限り、恐らくは最も確実かつ安全な方法が使えないことを悟り、しばし脱力してしまった筈であるがすぐさま首を振って頭を切り替えた。

ISが軍事兵器として利用されてしまうのなら、次に考えられるのは一夏をそもそもIS学園に入学させないということだ。

この出来事を防ぐには、まず一夏がISを起動させないということが大前提なのだが……ここにきて筈は頭を抱えることとなった。

(そもそも一夏はいつどこでどうやってISを起動させたんだ?)

この事がわからなかったらそもそも計画の練りようがない。

筈はうんうんと己の記憶を遡らせる。

初めて一夏がISを起動したことを知ったのはテレビのニュースであった。その時はあまりにも突然の想い人の登場に舞い上がってしまい、ニュースの内容など碌に聞いてもいなかった。

(では次だ!)

それ以来もちよくちよくと新聞に一夏の記事が掲載された時はその顔写真だけ切り取って捨ててしまっていた。記事の内容など碌に読んでもいなかった。テレビに一夏

のニュースが登場した時は顔写真に夢中でニュースの内容など——以下同文。

(で、では次だ！)

待ちに待った I S 学園での一夏との再会。六年ぶりの生の一夏の姿に箒の中の理性は消し飛んでいた。「まったく、お前は どうして I S など起動させてしまったんだ」といったちよつとした皮肉を交えた会話など微塵も行つた記憶がない。

「あ……ああ……あ……」

数分後、箒は自分のあまりの低能ぶりに耐え切れず、その精神を崩壊させていた。口からモクモクと煙のようなモノが立ち昇っているが大丈夫なのだろうか。

(まったく情けない……。なんで I S を起動させてしまったんだ？ など日常の些細な会話で気軽に話せる内容だろう！ というか、真つ先に訊いても何らおかしくはない話題だろう！ それなのに……なにをやつてるのだ私は！)

諦めてたまるか！ と箒は思考をフル回転させる。

まず I S を起動させるには当然の事ながら I S に接触する必要がある。しかし、男が I S と触れ合う機会など早々ないのだから、おそらく一夏の I S 起動は突発的な起動だったのだろう。

では突発的に I S を起動させてしまう状シチュエーション況とは何か。

これがアニメや漫画の世界だったら、悪の組織に狙われる中、逃げ込んだ一室に鎮座

する一機のIS——女性しか扱えないとされるソレだが助かるには……今起動させる
 しかない！ 頼む、俺に力を貸してくれ、ISッ！ ……的な展開もあるのかもしれない
 だが、ここは現実、法治国家日本だ。そのような展開ではおそろくないだろう。

「……」

おぼろげな記憶だと、初めて一夏のニュースを見たのが中三の冬頃……つまり受験の
 シーズンだ。

IS学園は受験の一環としてISの適性検査なるものがあり、その会場は市の多目的
 ホールなど案外、世間一般に身近なものである。

(もし一夏が受験会場を間違えたとして、その間違えた会場の先にISが鎮座してい
 たとしたら)

——好奇心のあまり少しくらい触ってしまうかもしれない。

「……まさかな」

最初の考えよりは幾分か現実味のある展開ではあるが、あくまで己のおぼろげで宛に
 ならない記憶をたよりに組み立てたものでしかないので妄想の域を出ない。妄想を下
 に計画を練るのは危険だ。

まさかその妄想がほぼ合っているなど——この時の筈にはわかるはずもなかった。

「……」

《白騎士事件》を防ぐことができず、まだ百パーセント確定はしていないとはいえ、一夏のＩＳ学園入学を防ぐことはかなり厳しいものがありそうだ。

となると残されたのはＩＳ学園に入学した一夏を様々な障害から守るということだが。

箒の表情には陰りがあつた。

握りしめられた右手をゆつくりと広げ、じつと眺める。

（私は……大丈夫なのだろうか……）

あらゆる障害から一夏を守るには逆行前の自分の実力ではまだ足りない。それこそ世界最強級の《力》が必要となる。

もし仮に私がブリュンヒルデ並の《力》を手に入れられたとして。

私はその《力》を正しく使うことができるのだろうか。

《力》に溺れず、愛する者のために振るうことができるのだろうか——。

怖い。

もしまた同じ過ちを犯してしまつたら、どうしようかと思うと身体が震える。

それほどまでに今まで箒は《力》に振り回されてきたのだ。

それがどれだけ危険なことであるのか——その悲しみと恐怖は、絶望はもう永遠に箒の中から消えることはない。

「それでも……」

震える身体を抑え、拳を握りしめると叫ぶ。

「——それでも、私がやらないといけないんだ!!」

忘れてはならない。

自分が今、どうしてこの世界に存在しているのか。

一夏を守るためだろう。

それが自分が一夏にできる唯一の贖罪なのだから。

「私は……今度こそ私は……」

一夏を守る。絶対に。この命に代えても守ってみせる。

揺らぎかけた筈の決意はその後、もう二度と揺らぐことはなかった。

十十十

ではIS学園で一夏を守るためにはどうすればいいのか。

その答えはいたって簡単だ。

セシリアや鈴のように自分もまた専用機持ちのIS代表候補生になるということ。

このことに尽きる。

有事の際、専用機持ちの代表候補生は場合によっては状況の鎮圧が任務として言い渡されることがある。

あの銀の福音の暴走時の一件がまさにそうだ。それ以外にも無人機襲来の一件、さらにはラウラのVTシステム的一件など、結果はそのようなことには至らなかったが本来ならばISに関して素人の一夏ではなく、代表候補生や学園の教師陣などが状況を鎮圧するべきだったはずの事例は少なからず存在していた。

今にして思えば、自分を含め学園は一夏をそんな死地に立たせすぎだったようにも思える。いくらブリュンヒルデの弟とはいえ、一夏はISに関して初心者であるはずなのに。死ななかつたのは……それもまた一夏の持つ《強さ》ということなのだろうか、それとも単なる運でしかなかったのか、過ぎ去ってしまった今となっては答えを探る方法はない。

とにかく有事の際、候補生ではない一般生徒はただ指を加えて見ていることしかできない。現に無人機襲来の一件では箒は一夏の力にもなれず、拳句の果てにはスピーカー越しに叱責して、敵の攻撃目標にされてしまうなど足を引く張ることしかできなかった。

まずは有事の際、戦場に立てる立場に自分を置いておかなければならない。一夏を守るにもまず話はそれからだ。実力をつけるためにも、専用機持ちの代表候補生になることは確定事項だ。

しかし代表候補生になると言っても、なりたいたいと思うだけでなれるはずもないことは

箒もまた百も承知しており、セシリア達から話を聞いた限り、そもそも優れたIS適性がなければ候補生になるための試験すら受けさせてもらえないらしい。……考えてみれば候補生、国家代表はISを動かすプロフェッショナルな訳で、高適性な人材が求められるのは当然といえば当然なのだ。

ネットで調べたところによると、最低でもB+以上の適性は必要なようだ。セシリアの適性がA+と言っていたので、余裕を見てA前後は欲しいところであるが。

そこまできて、箒はため息を吐いた。

「はあっ……」

箒が最後に——つまりIS学園入試の際の適性検査を受けた時、適性結果はCだったのだ。適性は変動するものと聞いているが、このままのランクではIS学園に入学はできて候補生になることなどできない。そもそも箒は姉の七光りな所があるのだ、IS学園に入学できたのも本人の実力というよりは政府の意向による部分が大きいと言っても過言ではないのかもしれない。

ああ、なんと歯がゆいものなのだろうか。努力や根性ではどうすることもできない、言うなれば《才能》という壁が箒の目の前に立ちはだかっている。

しかし、もうここまで来てしまったのだ。今更引き返すことなどできない。ボディーガードである黒服の男たちに無理を言って、この場所——女性であるならば誰でも無料

で受けることができるISの適性検査会場にやって来てしまったのだから。

その時、自分の番号が呼ばれる。ああ、もうどうにでもなれ！ と勢いよく椅子から立ち上がった箒は部屋に入り、検査官に頭を下げると、「ではISに手を触れさせてください」という指示に従い、鎮座する一機のISに近づいていく。

この適性結果が、私の運命を決める――。

ゴクリと唾を飲み込んだ箒は恐る恐るISに手を伸ばしていき――触れた。

ヒヤリ、と一瞬の冷たい感覚。

しかし、間もなくしてトクン、とその金属質の装甲からあたたかい脈動を感じた。何かと繋がったかのような、こそばゆい感覚。これまでも箒はISに触れたことはあったが、それは今までにない新たな体験だった。

なぜだろう。落ち着く。検査前はあるなりに緊張していたのにも関わらず。

いつまでもこうしていたいのかのような、そんな思いさえ抱いてしまう。

――守りたい人がいるんだ。こんな私だが……お前は力を貸してくれるか？

思わず心のうちでそう問いかけてしまう。

そう問いかけたところで検査官から声がかかる。

「もう手を離していいですよ」

「あつ、はい」

我に返った箒はサツ、とISから手を離す。

「あの、適性結果は……」

「解析が終わり次第、お呼びいたしますのでロビーでお待ちください。十分もかかりませんのでそうお時間は取りませんよ」

「そうですか。ありがとうございます」

頭を下げ、部屋を後にする。

呆気なく終わってしまった適性検査であるが、検査開始当初と裏腹に箒の中に焦りはなかった。

（そうだ……もしこの結果が良くななくても、またやり直せばいいんだ。候補生に必要な適性結果が出るまで、それこそ何度でも——）

よしつ、と新たに決意を胸に箒はロビーに向かう。己の贖罪のために——愛する人を守るために——箒はいい意味で前向きだった。

「……」

それにしてもロビーにあるベンチに腰掛けながら考える。

最後に感じたあの感覚——あれは錯覚だったのだろうか。

箒が手を離そうとしたまさにその瞬間、あのI Sは一際強く、鼓動を返してきたのだ。
ドクン、と――。

十十十

「篠ノ之さん！ 篠ノ之箒さあーん!!」

会場内が騒然とした雰囲気にもまれたのはその時だった。先ほど、検査室にいた女性が泡を食ったかのように走ってきたのだ。ただならぬ雰囲気に釣られ、思わず箒は腰を上げてしまう。

「えっと、あの……どうかしたんですか？」

「いいから来て！ すぐに来て！」

「え、あ……ちよつと……！」

強引に腕を引つ張られ、箒は女性に連れていかれてしまう。視界の隅ではあの黒服を着たボディガードたちが慌てたようにこちらに向かおうとしている光景が目に入った。

連れていかれたのは会場の奥にある一つの部屋だった。部屋の中にはすでにもう二人、男と女の姿があり、彼らもまたただならぬ雰囲気であった。

「連れてきました！」

「よし、よくやった！」

椅子に座らせられるなり、箒の前にバァン！ と紙とペンが提示された。

「えっと、これはいったい……」

状況がまったく理解できていない箒が呆然と口を開くと、目の前に立つ三人組はまさに興奮冷めやらぬといったように両手をバツ！ と広げ、まるでカーニバルのように言った。

「「篠ノ之さん!!!」」

「は、はい」

「「是非とも我が国の代表候補生に!!!」」

「はい？」

箒としては願ってもない話であったが、あまりにも突拍子過ぎて理解できていなかった。

「どうしてですか？」

そんな箒の問いかけに三人は思い出したかのようにアツ！ と口を開く。

「あれを持ってきて！ 適性結果用紙！」

「あつ、忘れてました！」

「すぐ持ってきますので！」

ドタドタと大の大人が駆け回るそのシユールな光景を箒はポカンと見守っていた。

「これが君の適性結果よ」

やがて一枚の紙を手渡された。

適性結果と聞いて、やはり箒は緊張した面持ちで恐る恐るその適性結果用紙を見る。

篠ノ之箒——適性結果——S——。

紙には箒も予想だにしない結果が記されていた。

「……」

あまりに良すぎる結果に言葉を失う箒に三人の大人たちは再び声を上げた。

「是非とも我が国の代表候補生に!!!」

十十十

IS適性はその名の通り、《ISに対しての相性値》を示している。

ISは女性にしか扱えない訳だが、そんな女性の中でも相性による《差》というものがあ、その適性分布は低適性であるEに近づくにつれて増えていき、逆にSに近づいていくほど減っていく。

特に適性Sは世界的に見てもかの《ブリュンヒルデ》や《ヴァルキリー》といった世界最高峰のIS操縦者しか到達してないとされる最高の適性ランクであるが……そのあまりの少数に中々見つけられる人材ではない。現役のIS操縦者で適性Sを誇っているのはそれこそ第二回モンドグロツソにおいて決勝まで勝ち進んだイタリア

国家代表のアーリーシャ・ジョセフスターフくらいのものであろう。

つまり何が言いたいのかといえ、今、世界では適性Aが実質的な最高ランクなのだ。適性Aであるならば十分スカウトものであり、たとえBランクであるとしても……運動能力に秀でていたり、適性の他にメリットがあればスカウトされることはある。

そんなご時世で仮に適性Sの女性が現れたらどうなるかは……もはや言うまでもないことだろう。

「待っていてくれ、一夏……」

篠ノ之箒は日本の代表候補生となった。

大切な者を守るために。

同じ過ちを、もう二度と犯さないために――。

箒の贖罪はまだ始まったばかりだ。

第3話

《白騎士事件》という歴史的な大事件により、世界中がISを《史上最強の兵器》であるという認識を持つこととなった。

《アラスカ条約》を始めとするISに関する規則が次々と締結されていき、IS発祥の地である日本にはISの操縦者育成を目的とした教育機関の設立が確約された。

この教育機関が後に《IS学園》と呼ばれるようになるのだが、同時に開かれることが決まったのがそのISを用いた世界大会——通称《モンド・グロツソ》の開催。

開催の理由には様々な諸説があるが、中でも代表的な諸説は自国のIS技術力の誇示の為と言われている。

《白騎士事件》によつて最強の軍事兵器としての称号を得たISであるが、その有り余るあまりの戦闘力のため《アラスカ条約》によつて軍事利用は原則禁止とされている。既存の兵器で言うのならば核兵器と似たような扱いといえればわかりやすいだろうか。

最強の軍事兵器の称号を与えられておきながらこれでは本末転倒もいところだと世界は思ったのだろう。核兵器は放射能などの問題があるが、ISにはそういった問題

がない。

平たく言えば飛行パワードスーツであるISを《スポーツ》として展開することで、兵器として利用せずとも莫大な経済的な利益を得ることができ、同時に自国の優れた技術力を大会時に世界各国に示すことで、有事の際の牽制にもなる。

無論、世間一般にはこのような情報は決して提示されてはいないが……《モンドグロツ》開催はつまりはそういうことだ。

各国は国を挙げてISの研究・開発を開始した。

しかしいくら技術力が優れていても、それを扱う操縦者もまた優れていなければ話にならないというのは言うまでもないことだろう。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

日本代表候補生になって早一か月。現在、箒は他の代表候補生の面々と共にISAリーナの周りをひたすら走らされていた。これはIS操縦者としてのトレーニングの一環……ではなくただのウォームアップである。

「ふっ……ふっ……ふっ……」

集団の先頭を走るのが、現時点で最も国家代表の座に近い位置にいるとされている織斑千冬。《織斑》という苗字からわかる通り、あの織斑一夏の実姉にして後にブリュンヒルデとして世界最強の座を手にすることになる女性である。

箒は一夏の幼馴染であつたため、必然的にこの千冬とも少なからずの面識があつた。再会の当初、一夏のことを訊き、元気でやっていると聞いたときは不覚にも涙がこぼれてしまった。もちろん千冬には「どうしたんだ？」と心配されたが、箒は「少し目にゴミが入っただけです」と誤魔化した。

——一夏が生きている……時間列的には当然のことのはずなのに、こんなに嬉しいなんて。

千冬さん……今度こそは一夏を守つてみせます。あなたを泣かせたりは……絶対にしません。

そして千冬の後には続く小柄な女性は——未来において、IS学園でも副担任として世話になつた山田真耶。代表候補生止まりではあつたがその実力は決して侮ることはできない。なにせあのセシリアや鈴に二対一の状況で勝つてしまうのだから。

初めて自己紹介をした時、箒は山田先生、この頃から大きかつたんだな、と思つた。ちなみに走っている今も箒のソレよりも遥かに大きい肉の果実がプルンと揺れている。

「ぜつ……ぜつ……」

箒の少し前を走る黒髪のサイドテールが特徴的な彼女の名は九条瑞樹。箒よりも前に候補生になつており、事あるごとに箒に突つかかつて来る人物であつた。

『篠ノ之箒……ねえ？』

姉の七光りで候補生になつたつていう』

——アンタには絶対、負けないから。

無論、ISの生みの親である篠ノ之束の妹なのだから、候補生になれば何らかのトラブルは避けられないだろうとは思っていた。ただ、初対面でいきなりこう来るとは正直思っておらず、故にその時は何も言い返すこともできず、ただ茫然と立ち尽くすことしかできなかった。

だが、その時仮に言い返せたとしても……箒は何も言わなかっただろう。

なぜなら瑞樹の言葉は篠ノ之束の妹として生まれてきた以上、絶対に避けられない運命であるのだから。

言い返している暇があるなら努力しろ。

そして自分が決して姉の七光りでこの場所にいるのではないということを証明しろ。

一夏を救うためならば……ああ、この程度の試練……難なく乗り越えて見せるさ。

かつての想い人を救うという確固たる意志がある箒は元来の負けず嫌いさが表に出そうになるのを歯を食い縛って堪え、この一か月間、ただ黙々と己がすべき鍛錬をこなし続けた。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

ISアリーナ外周一周のウォームアップももうすぐ終わる。

箒は前に行く袖希を追い抜くべくラストスパートをかけた。

十十

「ぜえ……ぜえ……」

「はあ……はあ……」

十分後、ISアリーナにて箒と柚希は二人して大の字で倒れていた。

タイムは十七分三十七秒五六。候補生になった当初と比べれば幾分かはマシであるが、このタイムでは……アウトである。

というのも教官から《ウォームアップ》と称されているこの訓練は一周五キロあるISアリーナの外周を十五分以内にゴールをしなければ重いペナルティが課せられるという鬼畜仕様であったからだ。

なお、今回制限時間内に間に合ったのは織斑千冬のみ。それ以外は皆——箒もまた例外なくアウトであった。

「十五分以内に走り終えなかった者は直ちに腕立て三十回×十セットを行え。いいな？」

このトレーニングメニューを組んだ教官——桐谷怜悧の容赦のない言葉に、箒は素直に従い、腕立て伏せを開始する。それを見た瑞樹がギリりと歯を食い縛って箒に続く。

しかし、そんな二人をよそに制限時間内に間に合わなかった他の候補生から悲鳴があがる。

「え〜!？」

「無理ですよ、そんなの!」

「大体、無理な話なんですよ! 十五分以内に五キロなんて……」

一般女性の五キロの平均タイムがおよそ三十分前後……一流のアスリートでも十五分を切る事ができればそれなりのタイムと言えるであろう。

だが、あくまでも彼女たち候補生は走ることを専門としたアスリートではない。そういう観点からしてみればたしかに彼女たちの言うことももつともであるのかもしれない。

しかし、教官の言葉は容赦がない。

「お前たち候補生は通常の人間をはるかに越える実力を身に付けなければならぬということは始めに言っておいたはずだ。——無理だというなら結構。何時だつてここから抜けてくれて構わない。やる気のない奴は帰れ」

「「ぐっ……!」」

その言葉を聞いて何も言い返せなくなった他の候補生たちは疲れ果てた身体をどうにか奮い立たせ、渋々ながら腕立て伏せを開始する。

『お前たち候補生に示す道はここで無様に挫折してIS操縦者としての道を諦める

か、それともこの試練を乗り越え人の限界を越えた力を身に着けるか——この二つにつだ。それ以外にはない』

この言葉は桐谷伶俐の口癖であった。

彼曰く、最強の兵器でありながらも今、世界に存在する I S は 4 6 7 機しか存在しておらず、それらをさらに世界で分割している。

つまり有事の際、I S は一機——よくて数機展開できればいい方で、I S 操縦者はそんな僅か数機しか展開できない I S を以て……究極的な話、たった一人で国を守らなければならぬのだ。

現実的に考えるのならば有事の際は戦闘機や戦車、ミサイルなどの既存の兵器がメインとなるだろうが……I S は原則 I S でしか倒すことができない。

もし仮に国の国家代表が負けるようなことがあれば、戦場の雌雄は一気に決することは明確であり、有事の際の I S 操縦者の実力はそれだけ重要な要素であるということがわかるだろう。

つまり I S 操縦者というものはそれだけ責任プレッシャーが付きまとう。そしてそれだけの責任のある立場を、普通の人間の範疇の実力ほどしか持たない者に任せていいわけがない。そう考えると、桐谷のこの言葉も無理もない言葉なのかもしれない。

無論、箒はそんな桐谷の思惑など知りもしないが……一夏を守るには《力》が必要である事実は変わりはない。これまでも剣術など一通りの武道を嗜んだ箒であつても、ここまでハードな訓練は経験したことがなかったが、それこそ箒の望むところである。

——過去の己を越えるためには……まだ足りない！ もつと……もつとだ!!

数十分の後、ペナルティである腕立て伏せを終えた箒は次なるトレーニングメニューをこなすため、休む間もなく立ち上がった。

＋十＋

ウォームアップを終えた後はいよいよＩＳを用いた訓練に移っていくことになる。

しかしＩＳは登場して間もない為にこれと言つて確立されたトレーニングメニューは確立しておらず、これから模索していく段階にあつた。

とは言えＩＳを用いた戦闘というのは言つてしまふのならば、戦場が空中という場所に移り変わってしまっただけで基本は地上で人間同士が殴り合うのと変わりない。

つまり重要視されるのは銃を用いた射撃の腕や剣や槍などを用いた武術の腕。無論、空中というこれまでにない戦場で戦うことになるのだから、地上でそれらを振るうようにはできないだろうが、ＩＳでの戦い方が既存の戦いの技術を応用させて行えばいいという事に変わりはない。

そういう観点からしてみると幼少の頃より父親が開く剣術道場に通つており、未来に

においてI Sを操縦してきた箒は他の代表候補生と比べると大きなアドバンテージを持つているということになる。現に代表候補生となつてまだ一か月しか(もう一か月というべきかもしれないが)経っていないが、箒の実力は候補生の中では上位の位置にいる。

しかし、そんな箒の細やかなアドバンテージなど何の気休めにもならないほどの実力者が存在するには存在しており、例えば織斑千冬には純粹な劍術、操縦技術においても負け、山田真耶には近接戦闘における技術では負けていないが、銃なども用いた幅広い戦術を得意とする彼女に対し、持ちうる手数之差で負けてしまつている。元から真つ向勝負を得意とする箒に対し、真耶は相性が悪いのかもしれない。

そして九条瑞樹。年齢的に見るのならもともと箒に近く、実力的にもそう大差のない彼女である。ことごとく周囲に突つかかってくる彼女であるが、その実力は決して口先だけではなかつた。

しかし、総合的な観点からしてみれば、自分の実力は瑞樹に負けてはいないと箒は思つている。刀を用いた真つ向勝負を戦闘スタイルにしている点からしてみても瑞樹と箒は似ていると言えれば似ている。

しかしただ一つだけ、瑞樹と箒には決定的な違いがあつた。

「はああああああつ!!」

「せいやあああああっ!!!」

現在、箒と瑞樹は互いにI Sを展開し、一対一の実戦形式の訓練を行っている。空中でぶつかりあい、刀と刀を打ち鳴らす。

篠ノ之流剣術を修めている箒とこும்刀を打ち合わせられるその時点で瑞樹の劍の腕もかなりのモノであることが窺える。

九条瑞樹は何か武道の心得があるのか——かつて箒は候補生で先輩である織斑千冬に問いかけたことがある。千冬は熱心なものだなと感心したように箒を見やっただ、よくはわからないのだがなと言いながらも教えてくれた。

——九条もまたお前と同じように《九条流》と呼ばれる江戸時代前から存在する劍をメインとした古武術を修めているらしい。ああ見えて家のほうは古くから代々続く由緒のある名家なのだそうだ。

何かしらの武術を修めているというのは箒の予想通りであったが、由緒のある名家と聞いた時は驚いた。由緒ある名家の女性といったらもつとこうおしとやかというか……そういうものを想像していたからだ。普段の瑞樹の様子から見ると現代的というか挑発的というか……とにかく名家生まれのものとは思えない立ち振る舞いである。

(……つと、そんなこと考えている場合ではないな)

罅迫り合いよる硬直から一旦距離を取り、仕切り直す。呼吸を整え、余計な思考を外

に絞り出す。これまでのパターンから考えると、そろそろあの技を使ってくる頃だからだ。

「ふっ……！」

しばし空中で対峙していると、不意に瑞樹がスラスターを吹かし、斬りかかってくる。これまでと何ら変わらぬ太刀筋のその斬撃を箒は半ば無意識的に己の刀で受け止めようとするが。

「がはっ！」

しかし、受け止めたはずのその斬撃は——まるですり抜けるかのように箒の刀による防御を無視した。

身体に走る衝撃——誰がどう見ようがクリーンヒットである。

(これだ……九条の防御をすり抜ける斬撃……)

《消える刃》。現時点で九条瑞樹しか使用することができず、九条瑞樹と篠ノ之箒の間にある明確な力の《差》——。

九条瑞樹の切り札ともいえるこの《消える刃》に箒は何度いいようにやられてきたのだろうか。《消える刃》使用前なら同等程度の実力であるが……《消える刃》を使用された戦闘において、箒が瑞樹に勝てたことは一度もない。

(今日こそは破ってやるぞ、《消える刃》を！)

箒は刀を構える。

どのような仕組みなのかは検討もつかないが《消える刃》パニシング・エッジは、相手が剣などで防御した場合、その防御を何らかの技術を以てすり抜けさせる剣技だ。

つまりこの九条瑞樹を前に防御という行為は無意味であり、対処法としては織斑千冬がそうしていたように瑞樹の斬撃を全て受けることなく回避する他にない。

しかし先にも述べたとおり瑞樹の剣の腕はかなりのものであり、回避するのにも困難を擁する。千冬並の実力があつてこそ全ての攻撃を回避するといった離れ業が可能なのであり、千冬並の実力はない箒では千冬の取った戦法を行うのは不可能である。

(せめてその攻撃の仕組みさえ見破れば、また新たな突破口が開けるかもしれない……！)

こんなところで立ち止まっている訳にはいかななのだ。

己の罪を償うためにも、一夏の命を守るためにも、候補生相手に苦戦を強いられている……ましてや敗北している場合ではないのだ。

「はあっ！」

刀がぶつかり、火花を散らす。

瑞樹は箒を刀越しにじっと見つめていたが、やがてそんな焦る心の内を見透かしたかのように告げた。

「《消える刃》を破るなんて、できっこないじゃない。アンタは所詮、姉の七光り……それで終わりよ」

「！」

次の瞬間、鏢迫り合いを起こしていた瑞樹の刃が箒の刃をすり抜けた――。

十十

「やりすぎなのでは？」

時同じくしてISアリーナにて、候補生の訓練を見ていた桐谷伶俐の元に一人の女性が現れた。彼女は桐谷の下で候補生のデータを取ったり、様々なサポートを行っている人物だった。

「いくら一国の代表を鍛えるからと言って、あなたの訓練は常軌を逸しています。このままでは候補生をやめる娘も出てくると思いますよ」

「……」

そんな彼女――山本の言葉に振り替えることなく桐谷はしばし訓練の様子を見守っていたが……やがて静かに口を開いた。

「……正直いって俺はな、ISなど生まれてこなければよかったと思っている」

「それはISの登場によって社会が女性優遇のものと変わりつつあることに対する言葉ですか？」

ISは原則、女性にしか動かせない。

そのことから世界では女性の立場というものが急速に上がってきている。《女尊男卑》などという単語が世間を飛び交うようになったのも、もう最近のことではない。

桐谷伶俐は男であり、そんな世の中が気に食わない上での言葉だとそう解釈した彼女の言葉であつたが、桐谷は首を横に振ってその言葉を否定した。

「《女尊男卑》などそんなことはどうでもいいんだ。大体、ISは女性にしか動かせないといつても、世界に467機しかないのだからな。IS登場によるこの盛り上がりも、そう遠くない内に冷めていくことになるのは少し考えればわかることだろう」

「ではなぜ？」

その問いかけに桐谷は複雑な眼差しを彼女に向けた。

「ISは《最強の戦闘兵器》だ。かつて《白騎士事件》の映像を見たことがあるが……まさに圧巻だった。一目見ただけで、このISが一機あるだけで戦況を変えられる性能が秘められているということが嫌でもわかるほどにな」

だが、それを扱えるのは女性だけなんだと桐谷は言葉を続ける。

「これまで戦争となれば戦場に立つてきたのは主に大人の男だった。物事には適材適所というものがあり、戦いはどうしても女性よりも男性の方が適していたからだ。だがこれからは違う。IS登場のせいだ、まだこんな大人にもなっていない少女たちを訓練

し、戦場に立たせなければならぬ時代が訪れてしまった」

「！」

その言葉を聞いて彼女は桐谷の言おうとすることを理解した。

万が一の有事の際、今この場に集う候補生の何れかは必ず戦場に立たねばならない。その時、桐谷は彼女たちの代わりにI Sを操縦し、戦場に出ることはできないのだ。

あらゆる《負》が蔓延する戦場において——血と暴力のみが辺りを蹂躪する戦場を生き延びるには、何よりも《力》が必要なのだ。

「無論、考えすぎだと言われればそれまでだ。だが、それでも俺は候補生たちにできる限りの《力》を身につけさせてやりたい。どんなに辛い状況が訪れたとしても、生き延びることができる強さをな……」

「桐谷教官……」

その言葉を聞いて彼女は自分のことが猛烈に恥ずかしくなった。こんなにも候補生のことを考えていた人間に自分はなんてはしたない言葉をかけてしまったのだろうか。――。

「——至らぬ言葉を申し訳ありませんでした。私も彼女たちのために全力でサポートさせていただきます」

その言葉に桐谷はああ、と頷くと「それでどうしたんだ？」と言葉をかける。彼女が

わざわざこのようなやり取りを交わす為に自分に声をかけてきたのではないということとを桐谷は見抜いていたからだ。

案の定、山本は思い出したかのように口を開く。

「ああ、そうでした。先ほど《倉持技研》から連絡があつたのですが……《完成した》、と」

「……そうか」

山本の言葉に桐谷は目を細め、言った。

「ついに代表の選出、さらには《専用機》の譲渡の時が来たか……」

一機は十中八九、織斑千冬のモノとなるだろう。その実力はずば抜けており、国家代表選出も異論はない。

だが残るもう《一機》の方は――。

「……」

腕を組んだ桐谷はそれ以上口を開くこともなく、アリーナにて訓練を行う候補生の面々を見つめ続けた。